【環境を考える】

里山が教える和の心　生物多様性って？　＜上＞　COP10　1年前に

2009年10月11日　中日新聞　中日新聞ＨＰ

さまざまな命がつながり合い、支え合う。その大切さを考え、自然の恵みをどう生かしていくかを話し合う国際会議が１年後、名古屋で開幕する。生物多様性条約第１０回締約国会議（ＣＯＰ１０）。「京都議定書」で有名な気候変動枠組み条約と並ぶ環境の２大国際会議ながら、認知度は高くない。生物多様性とは何だろう。

暮らしとどうかかわっているのか。市民にとっての開催の意義を考えてみたい。（社会部・豊田雄二郎）

おおだの森で下草刈りをする人たち=愛知県岡崎市樫山町で（飯野幸雄撮影）

１年後、「ＳＡＴＯＹＡＭＡ（里山）」は国際語になっているかもしれない。

海外の政府や民間非営利団体（ＮＰＯ）関係者ら７０００人が集うＣＯＰ１０。議長国でもある日本は、自然との共生や自然資源を将来にわたって利用するモデルとして「里山」をアピールするねらいがある。

兎（うさぎ）追いし　かの山　小鮒（こぶな）釣りし　かの川－唱歌の「故郷（ふるさと）」にうたわれた日本の原風景、里山。身近な自然が、各地で姿を消している。

町面積の９割が森林として知られた愛知県中央部の旧額田町（岡崎市に合併）に、姿形の美しさから「額田富士」と愛される里山、おおだの森がある。１９６０年代まで薪や炭にと重宝されたが、ここ数十年は人の出入りも途絶え、荒れた。　地元は８年前からまず山道を整備。桜やモミジを植え間伐や下草刈りも始めた。脳裏にあるのは子どものころ遊んだ風景」と住民の浅井董亮（まさあき）さん（６９）。人の手が入ることで、タヌキやシカも暮らす山に緑があふれ、生命の輝きに満ちる。

「自然とのつながりが希薄になっている時代。保護だけでなく、人と自然がともに生きる価値観は、世界の参考になる」

ＣＯＰ１０準備のため何度も来日を重ねる生物多様性条約事務局長のアハメド・ジョグラフさん（５５）は、里山をめぐる再生や再評価の物語を重視する。

誘致からＣＯＰ１０にかかわる名古屋商工会議所会頭の岡田邦彦さん（７４）は生物多様性を問われるたび、「何も難しいことではない。日本人にはそもそも根付いている心」と考える。

「例えば」と挙げるのが、俳句。森羅万象や動植物と四季の移ろいを結びつけ、その情緒や思いを５・７・５のわずか１７文字に込める。日本独特の文学は、海外からも高い注目を集める。

そして、里山。古来、日本には八百万（やおよろず）の神という思想がある。あらゆるモノに神は宿る。そこから生まれた自然への畏敬（いけい）の念、親しみ。生物や文化の多様性を認め合う心が、里山にはある。「自然は征服すべきもの」。そんな傾向が指摘される欧州とは対照的だ。

「ＳＡＴＯＹＡＭＡ」の心を世界に理解してもらう。それもまた、会議を成功に導くカギとなる。

【生物多様性条約】　１９９２年に採択され、１９１の国と地域が締結。３つの目的は▽地球上の多様な生物をその生息環境とともに保全▽生物資源を持続可能であるように利用▽その利用から生じる利益の公正、公平な配分。関係者はほぼ２年に１度集まり、その１０回目（ＣＯＰ１０）が来年１０月１１日から３週間、名古屋国際会議場（名古屋市熱田区）である。